

なぜ子どもに農業体験学習をさせるのか

濱沖敢太郎*・渡邊綾**

(2023年11月15日 受理)

Morality of Agricultural Experience Learning

HAMAOKI Kantaro, WATANABE Aya

要約

本研究の目的は、農業体験学習に対する教育的な期待が社会の中にどのように生じているのか、かつ、その期待が教育をめぐる価値観やその他の教育活動との関係においてどのような特徴を有しているのかを明らかにすることである。

以上の目的のもと、本稿では「子どもと農林漁業体験に参加したい人の特徴は何か」「農林漁業体験に対する教育的な期待は食育に関する他の活動と比較してどんな特徴があるのか」の2つの作業課題に取り組んだ。その結果、食育に対する関心の高い人ほど親子での農林漁業体験参加を望む傾向があること、そして、食育への強い問題意識というよりも生産プロセスの体験そのものが教育活動として期待されていること、が明らかになった。

この知見は、体験活動に従事する農業者や教師に焦点を当ててきた先行研究に対して、そのような活動が社会全体として支持される背景を明らかにした点で重要であるが、その支持が実際の体験活動の展開に与える影響を検証するという点ではなお課題を残している。

キーワード：農業体験学習、食育、保護者の教育期待

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 講師

** 一橋大学大学院 社会学研究科 院生

1. 問題設定

本稿の目的は、農業体験学習に対する教育的な期待が社会の中にどのように生じているのか、かつ、その期待が教育をめぐる価値観やその他の教育活動との関係においてどのような特徴を有しているのかを明らかにすることである。

農業体験学習とは、官公庁などによる明確な定義はないが、主に作物栽培、家畜飼育などの農作業を中心に農業・農村に関連する諸活動の直接体験を組み込んだ教育活動を指す。特に小学校を中心に普及しており、全国農村青少年教育振興会による全国的な調査では、2000-2010年における公立小学校の農業体験学習実施率は7～8割と高い水準を推移している（全国農村青少年教育振興会2002-2010）¹。こうした農業体験学習の高い普及状況から、室岡（2015）は2000年代を農業体験学習の「普及・定着期」としている²。

学校における農業体験学習は、1960年代以降、急激な都市化による教育環境の変化などを受けて、農業教育に関する研究群において注目されてきた。そうした先行研究では、農業・農村の教育的な価値や機能の提示や、農業体験学習の必要性と実施推進に関する議論などがなされてきた（たとえば、村岡 1966、桐山 1984、加藤監修 1986、藤岡 1986、七戸・永田・陣内 1990 など）。特に1990年代後半以降は、生活科や総合的な学習の時間の創設など、学校教育政策における体験学習重視への転換を受けて、農業体験学習の子どもへの教育・学習効果の検証に関心が向けられてきた。たとえば、農業の理解や自然への親しみに対する効果（丸山・浅野・菊池 2004）や、体験する農作業の内容・実施場所などによる教育・学習効果の違い（佐藤 2010、山田 2016）、などが明らかになっている³。

こうした農業体験学習の研究に対して、渡邊（2023）は、2000年前後から体験学習重視の教育政策の転換はあったものの、農業体験学習が教育課程上必修でない点や農業の就業需要の少なさを

¹ 全国農村青少年教育振興会は2009年度まで、公立小中学校を対象とした農業体験学習に関する全国調査を行なっている。最後の調査となった2009年度のデータでは、農業体験学習は全国の公立小中学校において66.5%（n=741）、小学校80.4%（n=509）、中学校36.2%（n=232）で実施されている（全国農村青少年教育振興会 2010）。また、20歳以上を対象とした「食生活及び農林漁業体験に関する調査」（2019）では、本人又は家族が農林漁業体験に参加したことのある人のうち、最も回答が多かった参加内容は「学校の取組」59.8%、次いで「実家、親戚、知人の手伝い」49.0%、「地方自治体や地域の取組」15.3%、「民間のツアーなど」8.6%となっている（n=1,434、複数回答）。

² 室岡（2015）は、1980年代前半、農業体験学習の個別報告が見られ始めた時期を「個別発生期」、1980年代後半から1990年代に文部省、農林水産省、JA等の諸機関によって組織的に支援されるようになった時期を「組織的支援期」としている。また2010年代以降、学習指導要領改訂による農業体験学習の主要な実施時間である総合的な学習の時間の授業時数削減によって活動内容の縮小・修正が迫られる「転換期」へと移行していることを示唆している。しかし、その後、農業体験学習に関する全国的な実態調査は行われていないため、「転換期」の動向については不明である。

³ ただし、これらの効果検証は、個別の学校や地域のみを対象としたものや、子どもの作文など直接的なアンケート調査以外から検討されたものも少なくない。そのため、農業体験学習の効果の実態については慎重に検討が必要である。

踏まえれば、「農業・農村の教育的な価値を支える論理は就業構造等の社会状況の変化や教育政策の動向といったマクロな視点からでは十分説明できない」（前掲 2023、p.148）と指摘している。その上で、渡邊は農業・農村の教育的価値や機能の本質を探るのではなく、学校現場において教師や参加協力する農業者たちが農業・農村を教育的に意味付け、教育的価値を社会的に構築する過程の重要性を指摘している。

しかし、渡邊（2023）の研究対象は、農業体験学習を実践する教師や農業者の検討に限定されている。そのため、教師や学校の農業体験学習に対する価値観の固有性や社会的な位置づけをより詳細に検討するには、学校関係者外の子どもに対する農業体験学習の認識と比較検討する必要がある。上述したように農業体験学習は、明確な定義はなく、広義には家庭菜園や市民農園、農業ボランティアなど、学校の教育活動以外にも広範に捉えることも可能である（室岡 2015 など）。加えて、食育基本法（2005年制定）では、食育は年齢に限定されるものではなく、国民全体が農林漁業体験活動⁴に参加・経験することが推奨されている⁵。食育政策の形成過程を検討した中村（2012）は、食育基本法の成立過程において、1990年代当時文部科学省が重視していた「生きる力」や「豊かな人間形成」を育むための体験と食育が接続し、食と密接に関わる農業の体験が取り上げられるようになったことを指摘している。農業体験学習は、学校外部でも実践が推奨され、その際に教育的な期待や意味づけがなされている。このことを踏まえるならば、教師や学校の農業体験学習に対する価値観の固有性を検討するには、大人が子どもに農業体験を経験させようとするメカニズムにまで視野を広げた上で、その社会的な位置づけを示す必要がある。

さらに、学校関係者外を含めた農業体験学習への教育的な期待は、学校の実践にも影響を及ぼすと考えられる。農業体験学習は教育課程上必修でないため、学校や教師が独自に実施するかどうかを決定している。その際に、実施の可否の判断や実施内容・方法の選択については学校内部だけでなく、保護者や地域のニーズ、より広くは大衆の農業への認識なども間接的ではあるが影響していると考えられる。たとえば、荻谷（1981）は、学校を社会的文脈からさまざまな影響を受けている存在として捉え、教育活動を組織化する際に、教師たちは社会的文脈を鑑みて、主観的な状況の定義や解釈を形成し、教育活動の組織化における準拠枠（集団パースペクティブ）としていることを指摘している。荻谷の議論は、特に高等学校において学力水準に基づき生徒の配分を統制する学校間格差の構造を念頭においたものである。そのため、本稿で扱う農業体験学習のように小中学校で実施されることが多く、進学に直接関与しない教育活動とは想定が異なることに留意が必要である。他にもカリキュラムの社会学的研究では、同様に教師のカリキュラムの決定過程と保護者や地域、

⁴ 農林漁業体験は、「食に関する関心や理解の増進をはかるためには、広く国民に農林水産物の生産に関する体験活動の機会を提供し、農林水産業についての意識や理解を深めてもらう」（第4次食育基本計画 p.13）ために重要な内容として位置付けられている。

⁵ 第2次食育推進計画以降、「農林漁業体験を経験した国民の割合」が目標数値として設定されている。「農林漁業体験を経験した国民の割合」について、第4次食育基本計画では、令和2年度に65.7%となっており、令和7年度までに70%以上とすることが掲げられている。

広くは社会との関連が指摘されている。例えば、田中（1999）は、特定のカリキュラムを実践する際の教師の意思決定においては「カリキュラムの運用に使える人的・物的な資源（resource）」や「その資源の調達を制約する学校内外の組織的な文脈（context）」（前掲、p.71）を考慮することが求められると指摘している。具体的には教育委員会の指示や教師の負担度、生徒の学習動機や保護者の意向などが挙げられるが、農業体験学習で言えば、学校が使用できる土地や農業用資材、栽培管理・指導ができる人材の確保、地域産業の動向も含まれるだろう。加えて、2017・2018年学習指導要領改訂では、地域と連携・協働した「社会に開かれた教育課程」が重視されていることから、カリキュラムを決定する際に地域住民の意向を考慮することはより一層重要事項となっている。このように保護者や地域の社会的状況や教育的ニーズは、学校内部での教師による教育活動の内容・方法の選択に一定程度影響を与えると考えられる。農業体験学習も学校教育の一環として行う上で、保護者や地域住民の意向を全く無視することはできないと言えよう。

また、既存の全国的調査（全国農村青少年教育振興会 2010）では、学校における農業体験学習は8割以上が保護者や農業関係団体、市町村などから支援を受けていることが明らかになっている⁶。そのため、農業体験学習実施の際に、保護者や地域、農業関係者といった学校周辺の協力を得ているという実態を踏まえると、学校の外部で保護者や地域住民が農業体験学習をどのように認識しているのかは実践の観点からも重要である。

以降、2節で作業課題とデータ概要の説明、3節、4節で作業課題の検証、5節で農業体験学習への教育的な期待についてデータ分析を踏まえた考察を行う。

⁶ 全国農村青少年教育振興会による2009年度調査（2010）によると、農業体験学習を実施している小中学校のうち、農業体験学習について「支援を受けていない」のは16.7%（n=493、複数回答）であり、換言すれば8割以上の学校が支援を受けている。支援組織の内訳は、「農家」57.6%、「PTA」38.3%、「農協」26.2%、「市町村」13.1%、「普及指導センター、普及指導委員等」7.6%、「農業高校」1.0%、「その他」20.2%である（n=493、複数回答）。

2. 研究方法

農業体験学習への教育的な期待を明らかにする上で大きな制約となるのが、その根拠となるデータの収集である。A) 教育をめぐる価値観が、B) 農業体験学習を含む具体的な教育活動に対する評価にどのように影響するのか、そして、それが C) 教師とそれ以外の大人でどのように異なるのか、以上3つの変数群がデータとして揃っていれば、回帰分析等を用いてリサーチクエスションにもとづくシンプルな分析課題を設定することが可能である。しかし、現実にはそのような意味で本稿の目的に合うデータは存在しない。その上で、今回は既存調査の二次分析を通じて部分的な回答を示すこととする。このため、まずは使用するデータの概要、意義と制約を確認しよう。

本稿で使用するのは『食生活及び農林漁業体験に関する調査（令和元年度）』（以下、『体験調査』）である。この調査は農林水産省消費・安全局消費者行政・食育課が「食事バランスガイド」の認知度及び参考度、「食生活指針」の実践度、農林漁業体験への参加経験割合等について全国を対象に確認し、今後の施策展開に向けての基礎資料とする」目的で実施したものである（中央調査社 2020）。実際の調査業務は一般社団法人中央調査社が受託し、楽天インサイト株式会社のモニターに対する調査が実施された。調査期間は2019年11月28日～12月25日、調査票の発送数は4,000票、回収数は3,645票（回収率：91.1%）である⁷。調査対象者の性別・年齢や居住地に関する情報は、中央調査社が作成した『令和元年度食育活動の全国展開委託事業 報告書』に記載されている。なお、本調査は、厳密には漁業や林業などを含む「農林漁業体験」を調査の対象としており、本研究が主に想定している農業体験学習よりも広義の体験活動をデータに含んでいる。しかし、本調査では主に農作業の体験を想定して質問項目が作成されており、農林漁業体験一般にかんする分析結果を農業体験にあてはめて考えることに大きな問題が生じるとは考えにくい⁸。

本研究においてこの調査データを用いるのは、この調査が冒頭に示した3つの変数群を最もよくカバーした全国調査だからである。既存調査データの二次分析である以上、使用できる変数や取り組める課題に制約はあるが、日本の農業体験をめぐる教育的な期待を把握する上で、現状最も適切なデータだと言えよう。本調査データを用いることによる制約や課題については、以下、変数や作業課題と関連付けて説明する。

本稿における第1の作業課題は「子どもと農林漁業体験に参加したい人の特徴は何か？」である。「なぜ子どもに農業体験させるのか？」というリサーチクエスションを解く上で必要な変数群をあ

⁷ 調査対象者については、東京圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）、近畿圏（大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、和歌山県）、地方都市（札幌市、仙台市、名古屋市、広島市、福岡市）、郡部・小都市（東北地方、北陸地方、九州地方）の4つの調査エリアごとに全体の標本数に占める割合を設定し、各エリアについて平成27年国勢調査の人口構成比率に合わせた性・年代・世帯構成割合別割付を実施している（中央調査社 2020）。

⁸ たとえば、「農林漁業体験にどんな工夫があれば参加したいと思いますか。」という質問項目では、回答の選択肢には「収穫物の調理体験ができること」といった農業に特徴的なものがあるのに対し、林業や漁業に特有の選択肢が用意されていない。

らためて確認すると A) 教育をめぐる価値観、B) 農業体験学習を含む具体的な教育活動に対する評価、C) 教師とそれ以外の大人を区別する指標である。これに端的に答えるためには a) 農業体験を経験させたいと思う理由、b) 農業体験を経験させたいという意欲の強さ、c) 教師か否かの職業分類、といった質問項目が必要になる。この3つを用意する上でまず難しいのが、b) 農業体験を経験させたいという意欲の強さ、である。なぜなら、現実には子どもが参加する農業体験学習の多くは学校が実施するもので、教師以外の大人にとっては子どもを農業体験に参加させるか否かという判断ができる場面がそもそも少ないからである。現実の農業体験学習が保護者の意欲と相当に切り離されている以上、農業体験学習を子どもに体験させたいかどうかを社会調査における調査項目として設定するインセンティブが低くなるのは当然である。

しかし、1節でも述べたように、教師や学校の農業体験学習に対する価値観が社会的にどのような特徴を持っているのかということが先行研究の課題であり、その意味で教師の価値観とそれ以外の大人の教育的な価値観が間接的にでも関連づいているのではないかということを検討すべきである。そこで、本稿では『体験調査』の質問項目「あなたが農林漁業体験に参加するとしたら誰と参加しますか」を利用する。この項目は回答選択肢の一つが「親子で参加する」となっており、他の選択肢と比較して子どもに体験させたいという意欲が観察できる。子ども本人だけに参加させるのと親子で参加するのでは意欲やそれに関わる理由にも違いがあると考えられるが、親子で参加したいという場合に特徴的な理由を分析に組み込めれば、なおそれでは説明できない部分を子どもに体験させたい意欲とその理由として考えることができるだろう。この点、『体験調査』には質問項目「あなたが農林漁業体験に参加するとしたら、その目的は何ですか」の回答選択肢に「親子で共同作業をしたい」が用意されており、上に示したような処理が可能になっている。また、この質問項目は a) 農業体験を経験させたいと思う理由、の変数群の条件を満たしてもいる。

残っている変数群は c) 教師か否かの職業分類であるが、『体験調査』には職業分類に関する調査項目が無く、リサーチクエスチョンを考える上で致命的な欠陥を抱えている。ただし、C) の変数群が A) と B) との結びつきを考える上でのコントロール変数であること、また、先行研究が教師や学校の教育活動に焦点を当ててきたことを考えれば、より一般的な課題として大人が子どもに農林漁業体験学習を経験させようとするメカニズムを明らかにすることには、今後の研究調査が教師とそれ以外の大人との関係を考える上でも有意義だろう。以上に示してきた理由から、本研究では「農林漁業体験に親子で参加したいという人の理由や属性にどのような特徴があるのか」ということを第1の作業課題とする。

本稿の第2の作業課題は「農林漁業体験に対する教育的な期待は食育に関する他の活動と比較してどんな特徴があるのか？」である。第1の作業課題が農業体験のみに対する関心を左右する要因を明らかにしようとするのに対して、第2の作業課題はより広くさまざまな活動の中で農業体験がどのような位置づけにあるのかを明らかにしようとするものである。これはリサーチクエスチョンに関わる変数群 B) 農業体験学習を含む具体的な教育活動に対する評価、に焦点を当てるものであ

る。先行研究との関わりで言えば、農業体験学習は各学校の教育課程上、社会科や総合学習などどの教科・領域に位置づけるのかという問題が取り上げられてきた。この点、『体験調査』には回答者がどの教科を過去好んでいたか、あるいは子どもの学習においてどの教科を重視するのか、といった質問項目がない。しかし、『体験調査』には「あなたは「食育」について、どのような取り組みが大切だと思いますか」「食育」に関する様々な催しが行われていますが、あなたが参加したいと思うものはありますか」という2つの質問項目が用意されており、回答選択肢も食育に関する様々な活動が取り上げられている。2つの質問項目はいずれも子どもが取り組むこと、あるいは子どもに参加させることを問うておらず、この意味で子どもに対する教育的意義を直接的に示すことができるものではない。しかし、農林漁業体験が食育にまつわる様々な活動の中で占める位置や評価をより細やかに描き出せるメリットがある。

さらに、これらの項目は、食育に関わる活動を細かく挙げているという点で、リサーチクエスチョンや変数群 A)、B) をめぐる問題をより丁寧に考える題材になりうる。そもそも、A) 教育をめぐる価値観、と B) 具体的な教育活動に対する評価、の境界はかなり曖昧である。教師や学校の場合、教育活動とその目的を言語化したり、それらを他の活動や目的と比較したりする機会も多いため、「教育をめぐる価値観」と「具体的な教育活動に対する評価」を明確に説明することができるだろう。一方で、多くの大人にとって両者は未分化な「特定の活動が教育上望ましいと思う理由」である可能性が高く、さらに言えば理由として明瞭に言語化できない場合もしばしばあるはずだ。

この問題はデータ分析の方針を考える上でも重要である。第1の作業課題のように問題を整理する場合、変数群 B) に対する説明変数として変数群 A) と C) が位置づけられることになる。そして、変数群 A) が変数群 B) を説明するという理解の仕方は、変数群 A) がより体系化されたものであり、個々の人間の価値観にとって中核的な位置を占めるという前提に基づいている。しかし、繰り返しになるが、教育を生業としない多くの大人にとって「教育をめぐる価値観」は必ずしも体系化されたものでなく、それに依拠しながら「具体的な教育活動への評価」を説明できるわけではない。このような価値観と個別の評価との関係をめぐる問題は、「特定の活動を好むかどうか」と「その活動を教育活動として重要だと思うかどうか」の間にも同様に生じるだろう。それゆえ、第2の作業課題では、食育に関する様々な活動に対する評価を一つの水準で考えながら、その中で農業体験にどのような特徴があるのかを明らかにしたい。

すでに見てきたように、2つの作業課題の性格は互いに大きく異なるが、「なぜ子どもに農業体験学習をさせるのか」という問題を考える上では補完的な関係にある。一方が農業体験への教育的な期待を単純化して、それに対する諸要因の複雑な影響に見通しを与えようとするのに対して、もう一方は農業体験への教育的な期待そのものの複雑さを諸活動との比較を通じて探索的に示そうとするものである。ただし、当然ながら、これらの作業課題、及び、それによって得られる知見が正しく補完的な関係にあると言えるかどうかは、具体的な作業を踏まえて判断しなければならない。

3. 農業体験を教育活動として評価する要因

本節は第1の作業課題「子どもと農林漁業体験に参加したい人の特徴は何か？」に取り組む。具体的分析は、以下の変数を用いた多項ロジットモデルによって行う。

被説明変数

(1) 「あなたが農林漁業体験に参加するとしたら誰と参加しますか。」

- 1 (基準): 「親子で参加する」
- 2: 1人で参加する
- 3: 夫婦で参加する
- 4: 友人と参加する
- 5: その他

説明変数

(2) 「あなたは「食育」について関心がありますか。」

- 1: 関心がない
- 2: どちらかといえば関心がない
- 3: どちらかといえば関心がある
- 4: 関心がある

(3) 「あなたが農林漁業体験に参加するとしたら、その目的は何ですか。」(複数回答可)

- 1: 農林漁業に対する理解を深めたい
- 2: 食に対する理解を深めたい
- 3: 自然を満喫したい
- 4: 地域の人とふれあいたい
- 5: 親子で共同作業をしたい
- 6: おいしいものを食べたい
- 7: その他

→各回答項目に関するダミー変数(選択は1、非選択は0)を作成

(4) 「性別」

- 0: 女性
- 1: 男性

(5) 「年齢層」

「20代」から「60代」まで5段階の回答

→各項目の中央値(25、35、45、55、65)をとる

(6) 「あなたが現在同居されているご家族の構成は次のうちどれですか」

- 0: 「一人暮らし」「夫婦のみ(事実婚を含む)」「その他」
- 1: 「親と子の二世帯」「親と子の三世帯」

(7) 「農林漁業体験の参加有無(回答者本人)」

- 0: 参加したことがない
- 1: 参加したことがある

(8) 「農林漁業体験の参加有無(回答者の家族: 高校生あるいは10代までに経験)」

- 0: 参加したことがない
- 1: 参加したことがある

(9) 「農林漁業体験の参加有無 (回答者の家族：20代以降に経験)」

0：参加したことがない

1：参加したことがある

→「これまで、あなた又はあなたの家族の中で農林漁業体験に参加したことがある人はいますか。」に「いる」と回答した者のうち、さらに「あなた又はあなたの家族が体験に参加された時の年代をそれぞれお答えください。」(複数回答可)に回答したものの選択肢を元に作成。家族に関して「10代まで」「20代以降」いずれも選択されていた場合は、2つのダミー変数が共に「1」となる。

表1 多項ロジットモデルに投入する変数の基本統計量

Statistic	N	Mean	St. Dev.	Min	Max
食育関心強弱	3,397	3.046	0.783	1	4
産業理解	3,397	0.388	0.487	0	1
食理解	3,397	0.482	0.500	0	1
自然満喫	3,397	0.469	0.499	0	1
地域交流	3,397	0.159	0.366	0	1
親子共同	3,397	0.259	0.438	0	1
食事満喫	3,397	0.505	0.500	0	1
目的その他	3,397	0.035	0.183	0	1
体験_本人	3,397	0.329	0.470	0	1
体験_家族子ども	3,397	0.242	0.428	0	1
体験_家族大人	3,397	0.116	0.321	0	1
性別	3,397	0.486	0.500	0	1
年齢層	3,397	46.363	13.672	25	65
家族構成	3,397	0.646	0.478	0	1

リサーチクエスチョンに必要な変数群に則って整理をすると、説明変数のうち(2)、(3)はA)教育をめぐる価値観、に当たる。これに対して、被説明変数の(1)がB)農業体験を含む具体的な教育活動に対する評価、である。以上2つの変数群の関係に対して、(4)、(5)、(6)がC)のコントロール変数になる。これらに加えて、本節の分析モデルにおいては、回答者本人または家族が農林漁業体験に参加したことがあるかどうか、(7)、(8)、(9)を説明変数に投入することとした。農林漁業体験への参加経験が今後の参加に対する意欲に肯定的・否定的に働くことが想定されるためである。

本研究で多項ロジットモデルを用いるのは、「親子で参加する」ことの特徴を他の選択肢と比較しながら明らかにするためである。リサーチクエスチョンに従って子どもに経験させたいと思うかど

うかに焦点を絞れば「親子で参加する」とそれ以外の二項ロジットモデルを用いるという考え方もありうる。しかし、子どものみに経験させるのと親子で参加するのは異なるという問題があることを踏まえると、それぞれの選択肢をモデルに反映させ、「親子で参加する」ことの特徴をより丁寧に検証する方が望ましい。以上のような前提を踏まえ、表2に示した分析結果を確認しよう。

表2 「誰と体験に参加するか」に関する多項ロジットモデル

	<i>Dependent variable:</i>			
	2:一人 (1)	3:夫婦 (2)	4:友人 (3)	5:その他 (4)
食育関心強弱	-0.338*** (0.098)	0.016 (0.098)	-0.276*** (0.096)	-0.282** (0.139)
産業理解	0.497*** (0.155)	0.212 (0.151)	0.086 (0.152)	-0.195 (0.240)
食理解	-0.420*** (0.151)	-0.242* (0.146)	-0.226 (0.146)	-0.792*** (0.231)
自然満喫	0.079 (0.149)	0.263* (0.145)	0.273* (0.145)	0.273 (0.215)
地域交流	0.977*** (0.223)	0.592*** (0.219)	0.953*** (0.221)	0.401 (0.334)
親子共同	-6.022*** (0.590)	-4.021*** (0.246)	-5.606*** (0.424)	-2.704*** (0.306)
食事満喫	0.622*** (0.152)	0.802*** (0.147)	0.614*** (0.147)	0.634*** (0.220)
目的その他	-0.673* (0.354)	-0.880** (0.365)	-1.515*** (0.429)	0.586 (0.390)
体験_本人	0.441* (0.237)	-0.167 (0.235)	0.330 (0.233)	0.111 (0.348)
体験_家族子ども	-1.046*** (0.236)	-0.411* (0.227)	-1.007*** (0.232)	-0.403 (0.344)
体験_家族大人	0.116 (0.249)	0.520** (0.236)	-0.087 (0.247)	0.042 (0.362)
性別	0.908*** (0.149)	0.652*** (0.144)	-0.278* (0.146)	0.197 (0.212)
年齢層	0.039*** (0.005)	0.053*** (0.005)	0.003 (0.005)	0.029*** (0.008)
家族構成	-2.235*** (0.198)	-2.560*** (0.193)	-1.948*** (0.196)	-2.017*** (0.247)
Constant	0.830* (0.458)	-0.634 (0.460)	2.880*** (0.443)	-0.038 (0.639)
n	3397	3397	3397	3397
deviance	7007.76	7007.76	7007.76	7007.76
Akaike Inf. Crit.	7,127.760	7,127.760	7,127.760	7,127.760

Note: *p<0.1; **p<0.05; ***p<0.01

まず、A) 教育をめぐる価値観、に関わる2つの項目の結果を確認したい。「食育」に関心があるかどうかについては、関心があるほど「1人で」「友人と」「その他」に対して「親子で」を選択する確率が高いという結果になった。次に「農林漁業体験に参加する目的」については、「親子で共同作業をしたい」以外にも「食に対する理解を深めたい」と思う人ほど「親子での参加」を望む傾向が強い。これに対して、「農林漁業に対する理解を深めたい」「自然を満喫したい」「地域の人とふれあいたい」「おいしいものを食べたい」といった理由については、むしろ「親子での参加」以外の選択肢を選ぶ傾向が見られる。また、興味深いのは農林漁業体験に参加する目的を「その他」と答える人ほど、「親子での参加」を選ぶ傾向が見られることである。残念ながら、「その他」を選択した際に記入する自由記述欄にどのような内容があったのかということは、公開されているアーカイブデータ、及び、中央調査社が作成した『食生活及び農林漁業体験に関する調査（令和元年度）』の報告書いずれにおいても示されていない。しかし、用意されていた選択肢では十分に汲み尽くせなかった「農業体験に対する教育的な期待」が様々な形で存在するという点は、農業体験の特徴を他の活動と比較しながら精査しようとする作業課題2の方針を支持するものと言えるだろう。

次に回答者の属性に関する項目の影響を確認する。「性別」については、男性だと「1人で」「夫婦で」の確率が上がるのに対して、「友人と」の確率が下がる。この点、「親子で」の参加は中間的な位置を占めていることになるが、性別がなぜこのような影響をもたらすのかということについての一貫した説明は難しい。「年齢層」は基本的に若い世代ほど「親子での参加」を選択する確率が高い。これは、子どもがいたとしても、世代が上がるほど子どもの年齢も上がり、一緒での参加が難しくなっていく、という理由が考えられる。「家族構成」については、親子で同居している人ほど「親子で」参加する確率は上がる。このこと自体は不思議なことではないが、これらのコントロール変数を投入してなお「価値観」等の変数が影響していることは重要である。

最後に、過去に農林漁業体験に参加したことの影響について確認する。回答者本人が参加したことがあるかどうかは「親子での参加」を選択する確率とほとんど関わらない。むしろ、回答者の家族が「高校生を含む10代まで」に農林漁業体験に参加したことがあると「親子での参加」を希望する確率が上がる。これはおそらく、自分の子どもが農林漁業体験に参加する姿を見て実際に親子で参加してみたくなった、ということの意味する。本論の展開からは少し逸れるが、この結果と同様、児童・生徒が実際に活動に参加している姿を見る中で、必ずしも明確にその意義を説明できないけれども次の学年や学校で同様の活動をやりたい、やってもいいと思える層が教師の中にもいるのではないか。これはあくまで推測であり、データによって根拠づけられるものではないが、教師や学校の価値観をより広い社会の中で検討する際の1パターンとして考慮すべきだろう。

4. 教育活動としての農業体験の特殊性

本節では作業課題 2「農林漁業体験に対する教育的な評価は食育に関する他の活動と比較してどんな特徴があるのか?」に取り組む。具体的には、以下の変数を用いた多重対応分析を実行する。

アクティブ変数

(A)「あなたは「食育」について、どのような取り組みが大切だと思いますか。」(複数回答可、3つまで)

- | | |
|-----------------------------|---------------------|
| 1: 栄養バランスの改善 | 2: 食習慣(規則正しく食べる)の改善 |
| 3: 食べ残し・廃棄の減少 | 4: 食料自給率の向上 |
| 5: "肥満"や"やせ"の問題の改善 | |
| 6: 農林水産業・食品業界に対する理解を深める学習など | |
| 7: 食品の安全性に関する知識の習得 | |
| 8: 食文化・伝統の継承 | 9: 地産地消の推進 |

(B)「「食育」に関する様々な催しが行われていますが、あなたが参加したいと思うものはありますか。」(複数回答可)

- | | |
|--------------------------------|-----------------|
| 1: 料理教室・料理講習会 | 2: 健康・栄養相談会 |
| 3: 農林漁業体験 | 4: 食品製造・流通施設の見学 |
| 5: 食生活の改善に関する講演会・シンポジウム・活動発表会等 | |
| 6: 食の安全に関する講演会・シンポジウム・活動発表会等 | |
| 7: 農林漁業体験に関する講演会・シンポジウム・活動発表会等 | |

→アクティブ変数はいずれも選択した項目が「1」、非選択の項目が「0」となる。なお、(B)の「農林漁業体験」については、「あなたが農林漁業体験に参加するとしたら誰と参加しますか。」の回答と組み合わせる形で、「農林漁業体験に親子で参加したいか」「農林漁業体験に親子で参加したいか」2つの変数を作成した。アクティブ変数は合計で17個である。

サプリメンタリ変数

(f1)「性別」

- | | |
|-------|-------|
| 0: 女性 | 1: 男性 |
|-------|-------|

(f2)「年齢層」

「20代」から「60代」まで5段階の回答

(f3)「あなたが現在同居されているご家族の構成は次のうちどれですか」

- | |
|-------------------------------|
| 0: 「一人暮らし」「夫婦のみ(事実婚を含む)」「その他」 |
| 1: 「親と子の二世帯」「親と子の三世帯」 |

表3 多重対応分析に用いる変数の基本統計量

Statistic	N	Mean	St. Dev.	Min	Max
A1_栄養バランス改善	3,609	0.650	0.477	0	1
A2_食習慣改善	3,609	0.529	0.499	0	1
A3_食品廃棄削減	3,609	0.481	0.500	0	1
A4_食料自給率向上	3,609	0.113	0.317	0	1
A5_肥満やせ改善	3,609	0.234	0.423	0	1
A6_産業に関する理解	3,609	0.060	0.238	0	1
A7_安全性に関する知識習得	3,609	0.283	0.450	0	1
A8_食文化や伝統の継承	3,609	0.236	0.425	0	1
A9_地産地消推進	3,609	0.206	0.405	0	1
B1_料理教室や講習会	3,609	0.452	0.498	0	1
B2_健康栄養相談会	3,609	0.246	0.431	0	1
B3_親子で体験参加	3,609	0.106	0.308	0	1
B4_その他の体験参加	3,609	0.163	0.370	0	1
B5_製造流通施設見学	3,609	0.460	0.498	0	1
B6_食生活改善の講演会等	3,609	0.177	0.382	0	1
B7_食安全の講演会等	3,609	0.182	0.386	0	1
B8_農林漁業体験の講演会等	3,609	0.065	0.246	0	1
f1_性別	3,609	0.486	0.500	0	1
f2_年齢層	3,609	3.129	1.369	1	5
f3_家族構成	3,609	0.644	0.479	0	1

あらためて、作業課題2の趣旨を確認しておきたい。作業課題1の分析結果では、食育への関心が強い人ほど子どもを農林漁業体験に参加させようとする傾向が見出されていた。この意味で教育をめぐる個人の価値観が農林漁業体験に対する評価に影響しているということは指摘できる。しかし、教師のように日常的に様々な教育活動に臨んでいるケースを除けば、教育についての秩序だった価値観を強固に持っていて、さらにそのような価値観にもとづいて様々な活動の関係を明瞭にイメージできている、という人はそう多くないだろう。そうであれば、具体的な教育活動に対する好き嫌いや教育的な期待が曖昧なものであることを前提にしながら、具体的な活動の好き嫌いがどのように分布しているのか、活動間の関係を明瞭にすることで、農業体験が他のどのような活動と近しく、あるいは遠く、そして集団全体で見た時にどのような期待を持たれているのかということを探るという方法もあって良いはずだ。本研究が多重対応分析を用いるのは、食育をめぐる様々な取り組みの関係を明瞭にし、その中で農業体験が占める位置や、農業体験に対する教育期待を明瞭にする方法として有益だから、である。

表4 食育に関する取り組み・催しの多重対応分析の結果

```

##
## Principal inertias (eigenvalues):
##
## dim    value      %    cum%    scree plot
## 1      0.002922  27.5  27.5  *****
## 2      0.002556  24.1  51.6  *****
## 3      0.000492   4.6  56.3  **
## 4      0.000147   1.4  57.6  *
## 5      9.8e-050   0.9  58.6
## 6      4.8e-050   0.5  59.0
## 7      1.7e-050   0.2  59.2
## 8      5e-06000   0.0  59.2
## -----
## Total: 0.010613
##
##
## Columns:
##
## name    mass  q1t  inr   k=1 cor  ctr   k=2 cor  ctr   k=3 cor  ctr   k=4 cor  ctr
## 1 | A1:0 | 21 618 41 | 108 375 82 | -85 234 58 | 16 9 11 | 0 0 0 |
## 2 | A1:1 | 38 618 22 | -58 375 44 | 46 234 31 | -9 9 6 | 0 0 0 |
## 3 | A2:0 | 28 571 33 | 75 354 54 | -54 183 32 | 22 31 28 | 6 2 7 |
## 4 | A2:1 | 31 571 29 | -67 354 48 | 48 183 28 | -20 31 25 | -6 2 7 |
## 5 | A3:0 | 31 290 28 | -20 42 4 | 41 188 20 | -16 27 15 | -17 33 61 |
## 6 | A3:1 | 28 290 30 | 21 42 4 | -44 188 22 | 17 27 16 | 18 33 66 |
## 7 | A4:0 | 52 641 6 | -21 436 8 | 13 162 3 | -7 41 5 | -1 2 1 |
## 8 | A4:1 | 7 641 50 | 168 436 64 | -102 162 27 | 51 41 36 | 11 2 5 |
## 9 | A5:0 | 45 269 13 | 25 244 9 | -1 0 0 | -6 14 3 | 5 11 8 |
## 10 | A5:1 | 14 269 44 | -80 244 30 | 2 0 0 | 19 14 10 | -17 11 27 |
## 11 | A6:0 | 55 471 3 | -10 424 2 | 3 37 0 | 1 9 0 | -1 2 0 |
## 12 | A6:1 | 4 471 50 | 161 424 31 | -47 37 3 | -23 9 4 | 11 2 3 |
## 13 | A7:0 | 42 370 17 | -18 74 5 | -32 231 17 | -11 26 10 | -13 39 50 |
## 14 | A7:1 | 17 370 43 | 46 74 12 | 81 231 43 | 27 26 25 | 34 39 127 |
## 15 | A8:0 | 45 451 14 | -30 292 14 | 14 63 3 | 14 60 17 | 11 36 35 |
## 16 | A8:1 | 14 451 45 | 98 292 46 | -45 63 11 | -44 60 55 | -34 36 112 |
## 17 | A9:0 | 47 608 12 | -35 411 20 | 23 183 10 | 5 8 2 | 4 7 6 |
## 18 | A9:1 | 12 608 47 | 135 411 75 | -90 183 38 | -19 8 9 | -17 7 24 |
## 19 | B1:0 | 32 648 25 | -9 20 1 | -37 310 17 | 37 316 90 | 2 1 1 |
## 20 | B1:1 | 27 648 30 | 11 20 1 | 44 310 21 | -45 316 109 | -2 1 1 |
## 21 | B2:0 | 44 780 14 | 1 0 0 | -46 774 36 | 4 5 1 | 1 0 0 |
## 22 | B2:1 | 14 780 43 | -3 0 0 | 140 774 111 | -11 5 4 | -2 0 1 |
## 23 | B3:0 | 53 421 6 | -5 35 0 | -1 1 0 | 15 299 24 | -8 87 23 |
## 24 | B3:1 | 6 421 49 | 43 35 4 | 5 1 0 | -125 299 199 | 68 87 193 |
## 25 | B4:0 | 49 589 9 | -31 547 17 | -1 1 0 | 4 7 1 | 8 34 21 |
## 26 | B4:1 | 10 589 48 | 161 547 85 | 7 1 0 | -19 7 7 | -40 34 105 |
## 27 | B5:0 | 32 642 27 | -61 450 40 | -6 5 1 | 37 171 90 | -12 17 29 |
## 28 | B5:1 | 27 642 31 | 71 450 47 | 7 5 1 | -44 171 105 | 14 17 35 |
## 29 | B6:0 | 48 689 11 | -19 97 6 | -46 577 40 | -6 12 4 | 3 3 4 |
## 30 | B6:1 | 10 689 53 | 87 97 27 | 213 577 184 | 30 12 19 | -16 3 18 |
## 31 | B7:0 | 48 677 12 | -33 251 18 | -41 397 32 | -11 28 12 | -3 2 2 |
## 32 | B7:1 | 11 677 54 | 148 251 80 | 186 397 145 | 50 28 54 | 12 2 11 |
## 33 | B8:0 | 55 750 4 | -20 508 8 | -14 236 4 | -1 2 0 | 2 4 1 |
## 34 | B8:1 | 4 750 56 | 295 508 113 | 201 236 60 | 20 2 3 | -25 4 17 |
## 35 | (*)f1:0 | <NA> 693 <NA> | -7 12 <NA> | 17 62 <NA> | -52 572 <NA> | 15 48 <NA> |
## 36 | (*)f1:1 | <NA> 693 <NA> | 8 12 <NA> | -18 62 <NA> | 54 572 <NA> | -16 48 <NA> |
## 37 | (*)f2:1 | <NA> 635 <NA> | -41 346 <NA> | -2 1 <NA> | -26 137 <NA> | -27 151 <NA> |
## 38 | (*)f2:2 | <NA> 942 <NA> | -45 235 <NA> | 5 2 <NA> | -70 584 <NA> | 32 120 <NA> |
## 39 | (*)f2:3 | <NA> 545 <NA> | -3 1 <NA> | -20 73 <NA> | -33 204 <NA> | 38 267 <NA> |
## 40 | (*)f2:4 | <NA> 860 <NA> | 20 92 <NA> | -6 9 <NA> | 43 423 <NA> | -38 335 <NA> |
## 41 | (*)f2:5 | <NA> 738 <NA> | 54 216 <NA> | 23 40 <NA> | 79 460 <NA> | -17 22 <NA> |
## 42 | (*)f3:0 | <NA> 726 <NA> | 26 72 <NA> | -28 82 <NA> | 52 292 <NA> | -51 281 <NA> |
## 43 | (*)f3:1 | <NA> 726 <NA> | -14 72 <NA> | 15 82 <NA> | -29 292 <NA> | 28 281 <NA> |

```

表4が多重対応分析の結果である。なお、ここでは調整された多重対応分析による解法の結果を示している。固有値と寄与率で見ると、第1軸と第2軸の比重が大きい。ただし、第3軸と第4軸において特に親子での農林漁業体験参加希望が特徴的な位置を占めているので、以下、第4軸までの分析結果を確認していきたい。なお、以下の分析において、厳密には「特定の項目を選択した場合」と「特定の項目を選択しなかった場合」はそれぞれ独自に軸に占める位置が決まるため、「選択した場合」が特定の軸で特徴的な位置を占めるからといって、「選択しなかった場合」も必ず逆方向に特徴的な位置を占めるわけではない。しかし、軸における各項目の位置やバイプロットを解釈する上では、「選択した場合」の方がより特徴的な位置を占めており、かつ、それに基づいた解釈も「選択しなかった場合」の位置と矛盾することはほぼないため、以下では「特定の項目を選択した場合」を中心に説明を行い、必要に応じて「選択しなかった場合」の位置を補足的に取り上げる。

図1 多重対応分析 第1軸 / 第2軸のバイプロット

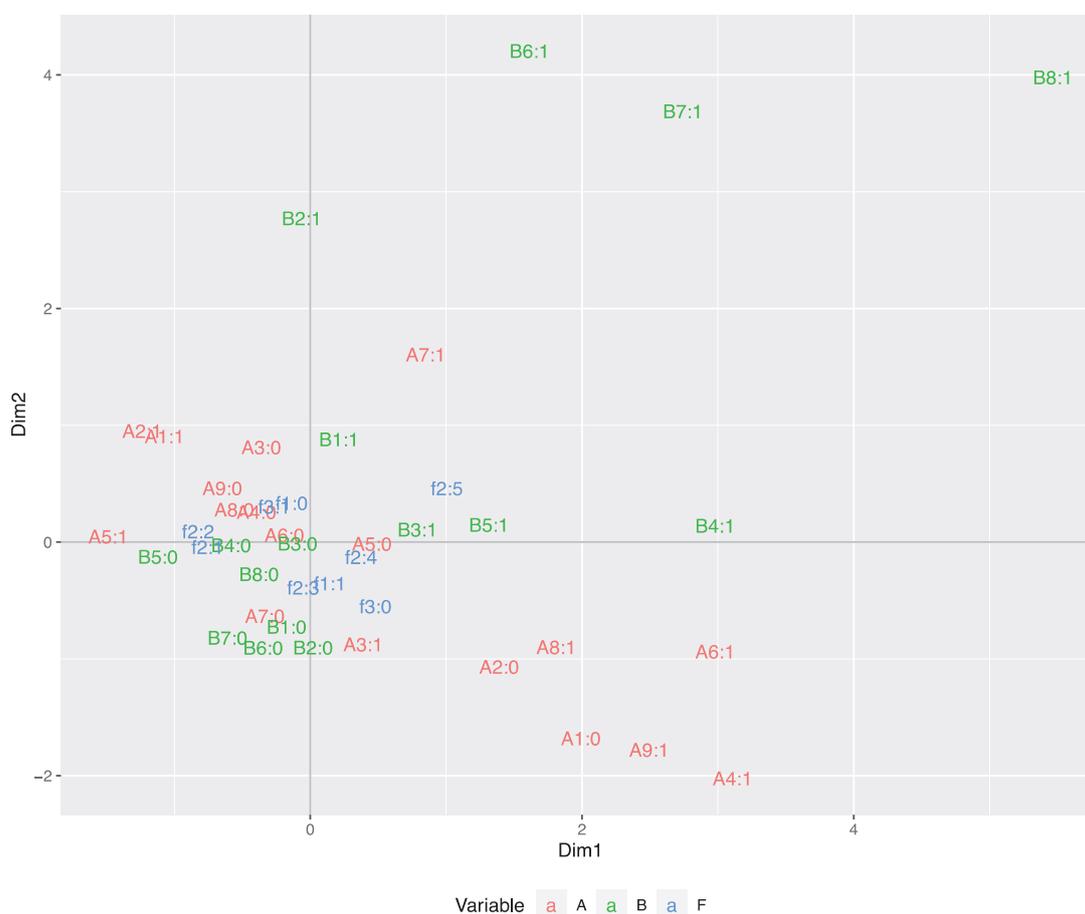


図1は第1軸・第2軸の成分スコアにもとづくバイプロットである。第1軸に注目すると、(B)「あなたが参加したい催し」に含まれる項目は「B2_健康・栄養相談会」を除いてすべて正に位置づいており、「B2_健康・栄養相談会」も負のスコアではあるもののほぼ0と言って良い。一方、(A)

「あなたが大切だと思う取り組み」については、「A3_食べ残し・廃棄の減少」「A4_食料自給率の向上」「A6_農林水産業・食品業界に対する理解を深める学習など」「A7_食品の安全性に関する知識の習得」「A8_食文化・伝統の継承」「A9_地産地消の推進」が正に位置づいているのに対して、「A1_栄養バランスの改善」「A2_食習慣（規則正しく食べる）の改善」「A5_“肥満”や“やせ”の問題の改善」は負の値を示している。このことを踏まえると、第1軸は「集団的な取り組みへの参加志向」と「個人的な取り組みへの参加志向」によって活動が分化していると言えるのではないか。その上で、親子での農林漁業体験参加は（B）「あなたが参加したい催し」の中で原点に近い位置にあり、このことは親子以外での農林漁業体験参加と比較するとより明瞭である。

次に第2軸に注目すると、（B）「あなたが参加したい催し」は、すべて正に位置づいている。一方、（A）「あなたが大切だと思う取り組み」については「A1_栄養バランスの改善」「A2_食習慣（規則正しく食べる）の改善」「A5_“肥満”や“やせ”の問題の改善」「A7_食品の安全性に関する知識の習得」が正に位置づいているのに対して、「A3_食べ残し・廃棄の減少」「A4_食料自給率の向上」「A6_農林水産業・食品業界に対する理解を深める学習など」「A8_食文化・伝統の継承」「A9_地産地消の推進」が負に位置づいている。これらを踏まえると、第2軸は「集団的な成果の重視」と「個人的な成果の重視」によって活動が分化していると言えらる。 （B）「あなたが参加したい催し」については、催しの内容そのものは成果を多くの人々が享受できるものであるが、質問項目が「あなたが参加したいと思う」という形式になっていることで、より個人としての成果に関連して位置づけられていると考えられる。その上で、親子での農林漁業体験参加は第1軸同様原点に近い位置にあり、また、第2軸の場合は親子以外での農林漁業体験参加も原点に近い位置にいる。つまり、第1軸、第2軸をもとに考えると、親子での農林漁業体験参加は食育に関わる取り組みとして特徴に欠ける、ということが言える。

図2は第2軸と第3軸によるバイプロットである。第3軸に注目すると、（B）「あなたが参加したい催し」は、3種類の「B678_講演会・シンポジウム・活動発表会」が正に位置づいているのに対して、「B1_料理教室・料理講習会」「B2_健康・栄養相談会」「B34_農林漁業体験」「B5_食品製造・流通施設の見学」は負に位置づいている。特に、親子での農林漁業体験参加は項目全体の中でも第3軸の負の方向に特徴的な位置を占めている。一方、（A）「あなたが大切だと思う取り組み」については、「A3_食べ残し・廃棄の減少」「A4_食料自給率の向上」「A5_“肥満”や“やせ”の問題の改善」「A7_食品の安全性に関する知識の習得」が正に、「A1_栄養バランスの改善」「A2_食習慣（規則正しく食べる）の改善」「A6_農林水産業・食品業界に対する理解を深める学習など」「A8_食文化・伝統の継承」「A9_地産地消の推進」が負に位置づいている。第3軸は「現状を否定的に理解するか否か」によって分かれていると考えられる。

図2 多重対応分析 第2軸 / 第3軸のバイプロット

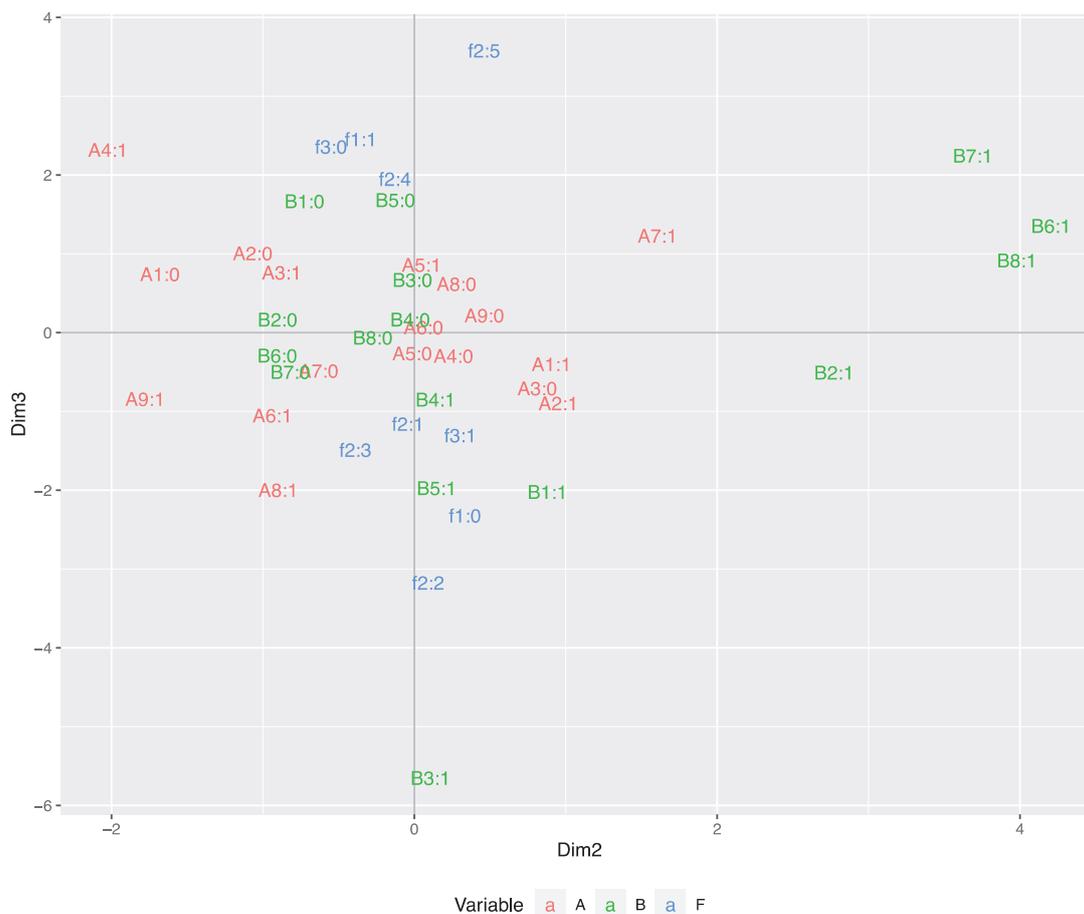
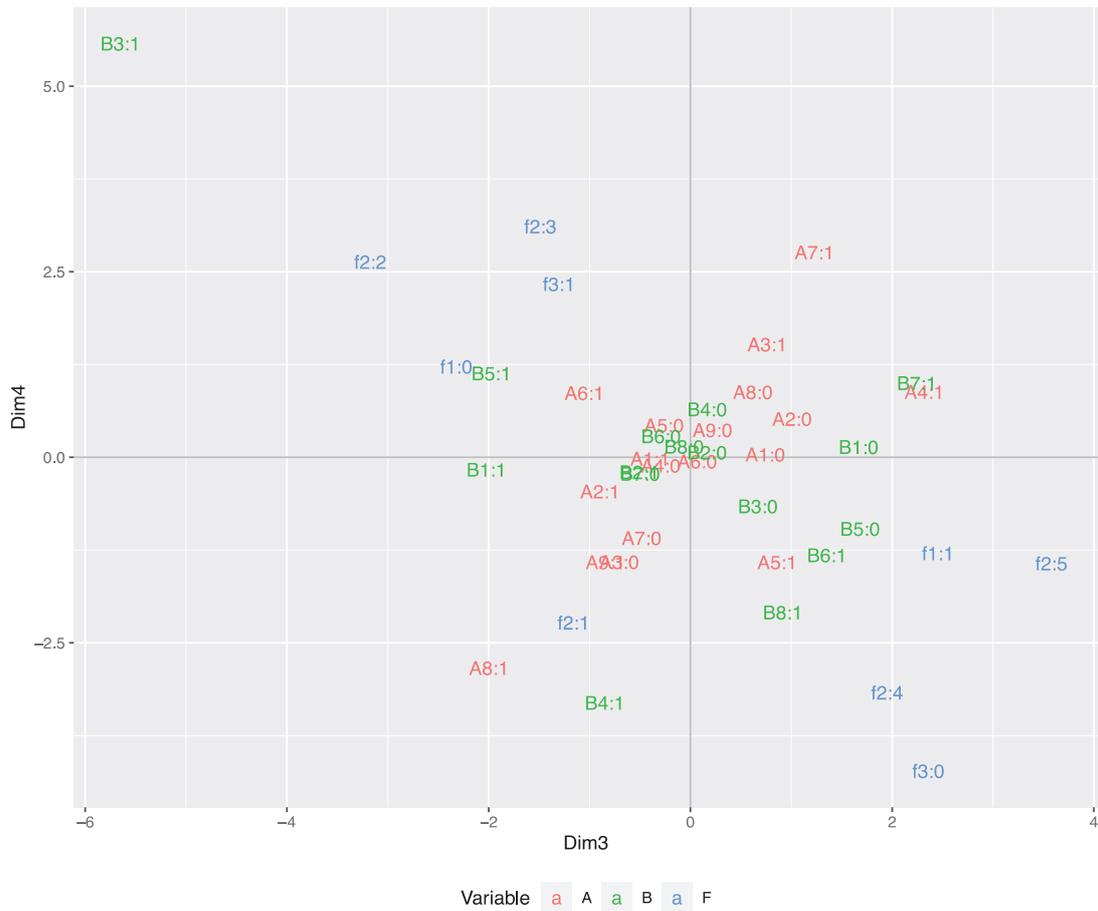


図3は、第3軸と第4軸によるバイプロットである。第4軸に注目すると、(B)「あなたが参加したい催し」は、「B3_親子での農林漁業体験参加」「B5_食品製造・流通施設の見学」「B7_食安全に関する講演会等」が正に位置づいているのに対して、「B4_親子以外での農林漁業体験参加」「B6_食生活に関する講演会等」「B8_農林漁業体験に関する講演会等」が負に位置づいている。(A)「あなたが大切だと思う取り組み」については、「A3_食べ残し・廃棄の減少」「A4_食料自給率の向上」「A6_農林水産業・食品業界に対する理解を深める学習など」「A7_食品の安全性に関する知識の習得」が正に、「A2_食習慣(規則正しく食べる)の改善」「A5_”肥満”や”やせ”の問題の改善」「A8_食文化・伝統の継承」「A9_地産地消の推進」が負に位置づいている。これらを踏まえると、第4軸は「食育に関わるテーマのうち、生産のプロセスに関心があるのか、それとも、消費のプロセスに関心があるのか」によって分かれていると考えられる。特に、第3軸までは同じ傾向を示していた「B3_親子での農林漁業体験参加」と「B4_親子以外での農林漁業体験参加」がそれぞれ生産プロセス、消費プロセスにより関心のある活動として分かれた点は興味深い。

図3 多重対応分析 第3軸 / 第4軸のバイプロット



なお、サプレメンタリ変数のうち、「f2_年齢層」は第1軸（若いほど個人的）と第3軸（若いほど否定的でない）に沿って、「f1_性別」と「f3_家族構成」は第3軸（女性、子を含むほど否定的でない）、第4軸（女性、子を含むほど生産プロセスに関心がある）に沿って分布していた。2節でも述べた通り『体験調査』には属性に関する項目が少ないため、属性が食育をめぐる意識と結びついている側面があることを確認した上で、詳細な検討については今後の課題としたい。

多重対応分析を通じて明らかになったのは、親子での農林漁業体験参加が、食育に関する様々な活動の中で取り組みの形態や成果については特徴に欠けるものの、「現状を否定的に理解する意識が薄い」という点、そして「生産プロセスに関心を向けている」点において特徴的だということである。語弊を恐れず言い換えれば、「親子での農林漁業体験参加は、とりあえず生産活動に触れてみる、そして楽しむ」ことが重視されている。この結果はあくまで一般的な大人が自分の子どもと農林漁業体験に参加するというケースに基づいたものであり、より教育や学習といった側面を期待される学校での活動と同一視はできない。とはいえ、学校においても体験活動以外の取り組みが可能であり、今回の分析においても産業理解や生活習慣の改善といった学校でも同様の活動を想定しうる項目を用いていたことを考えれば、食育に農林漁業体験が占める位置を理解する上で示唆的な結果で

ある。最終節ではこのような分析結果のインプリケーションについて、考察を展開する。

5. 考察

本稿では、子どもの農業体験学習に対する大人の教育的な期待を明らかにする上で、農林水産省による『食生活及び農林漁業体験に関する調査（令和元年度）』を二次分析した。

その結果、子どもと農林漁業体験に参加したい人の特徴は何か？（作業課題1）という問いに対しては、「教育をめぐる価値観」については食育への関心があるほど、親子での農林漁業体験の参加を希望する傾向が確認された。農林漁業や自然に関心がある場合や地域住民との交流を求める場合は、むしろ親子以外の参加を選ぶ傾向が見られ、親子での農林漁業体験への参加は農業や自然、地域といった観点よりも、食育として期待されていると示唆される。

また、農林漁業体験に参加したことの影響について、すでに回答者の家族が子ども期（10代）に農林漁業体験を経験している場合に、親子での農林漁業体験の参加を希望する傾向が確認された。自身の子どもが実際に農業体験学習に参加している姿を見聞きすることが、親子での参加希望を高める側面が示唆された。これについて、既存調査では、農業体験学習の実施率は全国の公立小中学校において66.5%（n=741）、小学校80.4%（n=509）、中学校36.2%（n=232）となっており、半数以上の小中学校で農業体験学習が実施されていることが明らかとなっている（全国農村青少年教育振興会 2010）。この既存調査は、『体験調査』の10年前のものであるため、直接的な比較はできないが、学校で農業体験学習が広く普及するなかで、子どもの農業体験を保護者が見聞きする機会も増えたと考えられる。加えて第1節で紹介した田中（1999）の議論を踏まえれば、こうした保護者のもつ子どもの農林漁業体験の参加意向は、学校内部での教師のカリキュラムの意思決定に影響し、農業体験学習の実施を後押しするものともなっている可能性が考えられる。これはあくまで推測であり、こうした保護者の意向と学校での農業体験学習の実施基盤との関係はより詳細な検討が必要であるが、保護者の意向と学校内部でのカリキュラム決定過程との相互関係が示唆される。

そして、農林漁業体験に対する価値観は食育に関する他の教育活動と比較してどんな特徴があるのか？（作業課題2）という問いに対して、食育に関する様々な活動と比較して、親子での農林漁業体験参加は、取り組みの形態や成果については特徴が見出せなかった。一方で、「現状を否定的に理解する意識とは縁遠い」という点、そして「生産プロセスに関心を向けている」点において特徴が見られた。

まず、「現状を否定的に理解する意識とは縁遠い」点について、親子での農林漁業体験参加は、講演会やシンポジウム、活動発表会とはかなり離れた位置にあった。現状を否定的に理解する立場である場合、講演会やシンポジウムいうなどを通して、食や農業に関する知識の獲得や共有を重視し、食品ロスや肥満・やせの解消、食品の安全性の問題といった食や農業をめぐる社会問題に関心を持つのに対して、親子での農林漁業体験参加は、体験を重視していると推測される。

次に「生産プロセスに関心を向けている」点について、親子での農林漁業体参加と親子以外での農林漁業体験参加がそれぞれ生産プロセス、消費プロセスにより関心のある活動として分かれていることが確認された。既存の学校教育における全国調査でも、農業体験学習の内容として「農作業のすべて」(合計 54.2%, 小学校 58.2%, 中学校 34.5%)「農作業の一部」(合計 71.6%, 小学校 71.1%, 中学校 73.8%) に比べて「農畜産物加工」(合計 27.4%, 小学校 27.6%, 中学校 26.2%) を実施している場合は少ない(全国農村青少年教育振興会 2009, 複数回答, 合計 n=493, 小学校 n=409, 中学校 n=84)。調理などの消費プロセスに近い農畜産物加工よりも、種まきや収穫といった生産プロセスに近い農作業を指向する点は、学校での農業体験学習と親子での農林漁業体験参加とで共通点が見られる。子どもの農業体験学習では農作業などの生産プロセスを扱うものとして学校内外で共有されていると考えられる。

他にも、親子の農林漁業体験参加が生産プロセスの体験を重視している点は、学校における農業体験学習の実践の組織化原理との類似性が見受けられる。先行研究では、学校の農業体験学習において子どもの生活・社会認識の再構成を基盤的な原理としていることが指摘されている(渡邊 2023)。親子での農林漁業体験参加が、日常的に触れる機会が少ない生産プロセスを重視する背景には、この子どもの生活・社会認識の再構成を意図しているのではないかと考えられる。たとえば、消費プロセスの側に位置づく、食習慣の改善、“肥満”や“やせ”の問題の改善、食文化・伝統の継承、地産地消の推進などは、個人が農産物の消費や食事の場面で日常的に心がけることができる取り組みだと理解できる。それに対して、生産プロセスの側には、食料自給率の向上、農林水産業・食品業界についての学習といった生産・産業の構造に関連する取り組みが含まれている。こうした項目は消費プロセスの側に比べると、日常の生活を変化させるものとは考えにくい。もちろん、生産プロセスの側には、「食べ残し・廃棄の減少」や、「食品の安全性に関する知識の習得」など、個人の日常生活を変えうる取り組みも一部含まれているので、断定することはできない。しかし、この結果からは、親子での農林漁業体験参加は、日常的な農産物の消費や食事をめぐる実践の変化を期待しているというよりも、農業や食料生産に対する認識を変えることを期待しているのではないかと考えられる。この点で、学校教育で意図されていた子どもの生活・社会認識の再構成と親子での農林漁業体験参加での期待は共通点をもつのではないかと考えられる。

以上より、親子での農林漁業体験参加は「とりあえず生産活動をやってみる、そして楽しむ」といった生産活動の体験を通じた楽しさを重視していることが推測できる。本分析におけるデータの特性上、断言はできないものの、子どもを農業体験学習に参加させたい大人たちは、産業理解を深めることや、具体的な教育的効果といった明確な目的のもとで参加意向を示しているとは言い難い。データ上の限界はあるものの、分析の結果からは子どもの農業体験学習に対する教育的な期待の捉え難さとして理解することも可能である。

以上の2つの作業課題の分析結果から、子どもの参加する農業体験学習は、「子どものための」独自の指向性を持つことが示唆される。まず、農業体験学習に関心を持つきっかけは、子どもの実

際の農業体験に由来していることが多い傾向にある。次に参加したい活動内容は、食や農業に関する具体的な知識の獲得や共有、地域交流といった側面よりも、体験すること自体が先行する場合が多く、特に農作業などの生産活動に関連する体験に対して関心をもたれやすいと考えられる。この点で、大人が自身の食や農業に関する関心から出発し、子どもと一緒に関心や理解を深めていく活動と子どもの農業体験学習とは異なる性質を持っていると考えられる。子どもの農業体験学習は、子どもの体験から出発し、体験を通じてどのような知識や成果を得るかよりも、むしろ農業生産に関する体験そのものが重視される活動と捉えることが妥当であろう。

こうした状況の背景の1つとして、食育基本法が形成される過程で、農業体験に教育的な意味づけがなされたことが考えられる。食育政策の形成過程をまとめた中村（2012）によると、食育政策は、2001年に発生したBSE問題への対処を契機とし、当初は食の安心・安全の確保や食に関するリスクコミュニケーションを中軸としていた。食育の法制化の議論が進むなかで、2003年に食品安全基本法が制定し、食の安全・安心の確保は食育の重要課題から切り離され、その後の食育政策形成過程では、当時、文部科学省において課題とされてきた体験を通じた子どもの「生きる力」の育成へと接近していった（中村 2012）。その結果、2005年に制定した食育基本法前文では、「子どもたちが豊かな人間性をはぐくみ、生きる力を身に付けていくため」の食育の重要性が強調されている。このように食育政策は、食育基本法制定までの過程において、農業体験を通じて子どもの「生きる力」の育成への寄与を打ち出してきたのである。こうした食育政策の形成過程と本稿で確認された子どもの参加する農業体験学習において、具体的な知識よりも体験を求める点は共通点が見られる。食育政策上の農業体験の位置づけが、実際に食育の取り組みに参加する市民にも浸透している可能性が考えられる。

「生きる力」を育成する農業体験という認識が学校の外部にも広がる一方で、本稿の分析では、農業生産の体験そのものが重視されており、体験がどのように「生きる力」に寄与するのかについて共通理解は見出せなかった。学校教育の観点に立ち戻ると、子どもの農業体験学習が体験そのものを重視する性格を持つのであれば、子どもの農業体験学習における教師の役割はより一層重要度を増すと考えられる。保護者や地域住民が、子どものための農業体験自体を重視していることは、学校での農業体験学習の実施の後押しとなるだろう。一方で、農業の体験を通じてどのような知識の獲得や教育的な達成が期待されるのかといった、農業体験学習の教育目標や方法、評価などの具体的な実践内容の組織化は教師に委ねられる。農作業の体験に明確な教育的な意味づけや具体的な実施内容を決定し、教育実践として組織するには教師のカリキュラム決定過程や専門性の発揮が欠かせないと言えるだろう。この点、先行研究で検討されてきた教師や実践に参加する農業者による農業体験学習の教育実践としての組織化過程と、本稿で検討した保護者や地域住民を含む社会全体の食育や農業体験学習に対する意識とを架橋する検討が今後必要であろう。

以下、本稿の意義を2点述べる。

第一に、これまでの学校における農業体験学習に関する研究は、学校内部の実践に着目してきた

のに対して、本稿では、学校関係者外を含む子どもの農業体験学習に対する期待を検討したことである。その結果、学校関係者外における子どもの農業体験学習においては、子どもが参加しない場合に比べて、食や農業に関する現状を否定的に理解する意識とは縁遠い、生産プロセスに関心を向けているといった独自の特徴や指向性が確認された。これらの特徴や指向性は学校での農業体験学習との共通性も見られる。本稿の結果からは、学校関係者外の子どもの農業体験学習の認識と実際に農業体験学習の具体的内容を構成し、実践する教師の意識との関連について今後さらなる研究の展開がありうることが示唆される。

第二に、本稿では農業体験学習について全国規模のデータを用いて分析したことも重要である。これまで全国農村青少年教育振興会が 2009 年度まで公立小中学校を対象とした全国的な農業体験学習の実施状況調査を行っていたが、団体が解散して以降、全国的な動向の把握は十分に行われていない。そのため、2010 年以降の農業体験学習に関する先行研究ではアンケート調査などを用いて全国的状況を把握する調査・分析は見られず、多くは実践事例の検討が中心である。またアンケート調査であっても限られた地域、実践の場に対象が限定されたものが多い（山田 2016 など）。本稿で用いた『食生活及び農林漁業体験に関する調査』データの二次分析による研究も、町田（2022）など少数である。本稿の取り組みは、今後の農業体験学習の全国的な実態把握の方法を示すという点でも意義がある。

最後に本稿の課題を 2 点述べる。

第一に、データ上の制約である。2～4 節で詳しく述べたように、本稿では既存調査データの二次分析であるため、使用できる変数や取り組める課題に制約があった。特に本稿では、親子での参加希望という形で、子どもへの農業体験学習の期待を析出したため、大人が子どもに農業体験を経験させようとするメカニズムの中でも、親子に限定された結果となっている。親子に限定されない大人一般を検討対象にした詳細な分析のためには、問いに則した独自調査が必要であろう。

第二に、学校教育内外における農業体験学習の期待や意味づけがどのように影響し合っているのか／いないのかという点については検討が及ばなかった。1 節で述べたように、学校における教育活動の組織化の際には、保護者や地域の社会的状況や教育的ニーズも影響を及ぼすと考えられる。しかし、本稿のデータでは職業分類などから、教師とそれ以外に分けて分析することが不可能であった。そのため、学校の成員である教師と、保護者との意識の違いや両者の影響度合いについては検討できていない。本稿の結果にみられた、子どもの農業体験学習における固有の期待がどのように学校教育内での実践に影響を及ぼしているのかについては、教師と保護者などといった形で分類可能な調査設計や、個別事例に絞って教師と学校外部者との双方に聞き取り調査を行うといったデータ取得の必要があるだろう。

〈付記〉

本稿は、1・5節を渡邊が、2～4節を濱沖が執筆し、その後両名で協議し加筆修正を加えた。

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから〔「食生活及び農林漁業体験に関する調査、2019」（農林水産省消費・安全局消費者行政・食育課）〕の個票データの提供を受けた。

また、表の作成にあたっては、R の `stargazer` パッケージを使用している。

〈参考文献〉

- 中央調査社、2020、『令和元年度食育活動の全国展開委託事業 報告書』。
- 藤岡貞彦、1986、「地域と学校—日暮里中農業実習にまなぶ」『教育』第36号、pp.8-17.
- Hlavac, Marek (2022). `stargazer`: Well-Formatted Regression and Summary Statistics Tables. R package version 5.2.3. <https://CRAN.R-project.org/package=stargazer>
- 加藤一郎監修・(財)農村開発規格委員会編、1986、『教育と農村—どう進めるか体験学習—』地球社。
- 苅谷剛彦、1981、「学校組織の存立メカニズムに関する研究—高等学校の階層構造と学校組織」『教育社会学研究』第36集、pp.63-73.
- 桐山京子、1984、「日暮里中学校の農業体験学習（農業をめぐる教育の現状と課題<特集>）」『農業と経済』第50巻第4号、pp.38-45.
- 丸山敦史・浅野志保・菊池眞夫、2004、「小学校における農業体験学習の効果—東京都練馬区を事例として—」『千葉大園学報』第58号、pp.59-66.
- 町田大輔、2022、「農林漁業体験への参加希望者はどのような体験を望んでいるのか？—属性等による比較—」プレプリント/バージョン1. <https://doi.org/10.51094/jxiv.164>
- 村岡五郎、1966、「農業教育の義務教育の必要性について」『日本農業教育学会誌』第1巻、pp.7-10.
- 室岡順一、2015、「小学校における農業体験学習の活動内容とその教育的な意義：学校農園型を中心とした分析」博士論文、広島大学生物学研究科。
- 中村麻理、2012、『シンボル構造と集合行為をめぐるダイナミクス—「食育」とスローフード運動・JAの食農教育から—』彩流社。
- 農林水産省、2019、「食生活及び農林漁業体験に関する調査」
- 佐藤真弓、2010、『都市農村交流と学校教育』農林統計出版。
- 七戸長生・永田恵十郎・陣内義人、1990、『農業の教育力人と自然を活かす道』農山漁村文化協会。
- 田中統治、1999、「カリキュラムの社会学的研究」安彦忠彦編『新版カリキュラム研究入門』勁草書房。

渡邊綾、2023、「学校教育における正統な教育実践の組織化過程——小学校における農業体験学習を事例として——」『教育社会学研究』第112集、pp.147-168.

山田伊澄、2016、『農業体験学習の実証分析—教育的効果の向上と農村活性化をめざして』農林統計協会.

全国農村青少年教育振興会、2001-2006、『小・中学校における農業体験学習の取組に関するアンケート調査』.

——、2007-2010、『農業体験学習のアンケート結果等：小・中学校及び農業体験学習の効果調査等』.